

パリの虐殺

—マキアベリ主義者ギーズ公爵—

谷崎 寿人

The Massacre at Paris
Duke of Guise, a Machiavellian

Hisato Tanizaki

1

「パリの虐殺」(The Massacre at Paris)はマーロウ(Christopher Marlowe)の作とされているものであるが、その創作期に関しては明らかでない。古版本で現存するものは、とびらに Written by Christopher Marlow と書かれているが、出版年は記載されていない八つ折り本(octavo)のみであるからである。さらにこれはマーロウの他の作品と異なり、出版業者組合登録簿(Stationers' Register)にも記載されていない。ボウアズ¹⁾(Frederick S. Boas)によると、この作品にあらわれる事件中、法王シクスツス五世の死(Sixtus V, 1590年8月27日)以後、上演記録の最初である1594年1月の間、つまり1590-3年が執筆の時期であり、さらにその時期をせばめると1592年後半がその時期ということになる。

マーロウは何を資料としてこの劇を作ったのであろうか。ジャンルから言えば、史劇のひとつであり、1572年から1589年にいたる間のフランスの歴史を画いたものである。前半第10場まではジャン・ド・セレ(Jean de Serres, 1540?-98)の「フランス内戦史」の第10巻(Book X of *Commentaries of the Civill Warres in Fraunce*, 1576)、英訳ティム(T. Timme)によっている。後半第11場から第24場(最終場)に関しては、前半におけるような原典はなさそうである。そのかわりマーロウは種々の情報をいろいろなところから得ていたようである。たとえばギーズ(Guise)、アンリ三世(King Henry the Third)ロレイン枢機卿(Cardinal 'of Lorraine')らの虐殺に関してはパンフレットが流布していた。それらによって当時のフランスの状況に通じていたのであろう。そしてそれらをこの劇に画きだしたのである。またマーロウはケムブリッジ時代の庇護者であるトマス・ウォルシンガム(Sir Thomas Walsingham, 1568-1630)から、そしてトマスの親戚であるフランシス・ウォルシンガム

(Sir Francis Walsingham 1530?-90) が聖バーソロミウの新教徒暗殺事件 (1572) の時の駐仏イギリス大使であったところから、このフランスから当時のパリのことを聞いて劇にとりいれたものであろう。ただこれら資料は資料として、創作にあたってはボウアズの言うように、「彼 (=マーロウ) はフランス史上の出来事および人物を扱い、フランスの資料を用いていたけれども、この劇を作るにあたっては、主として古典古代および文芸復興期のイタリアに構想を得るという事実を強調することは重要である。中心人物、ギーズ公爵は一度ならずまさにジュリアス・シーザーの役割を演じている。彼 (=ギーズ) が国王の地位を手に入れようという野心を明らかにする重大な独白において、彼 (ギーズ) はこのローマの独裁者の処世訓のひとつを引用する。『シーザーが兵士達に言ったように、わたしも言う、一わたしを嫌う者たちを、わたしもはげしく嫌うということをわが身に覚えさせよう。』」である。

古版本は幕の区分はおろか場の区分すらなされていない、またマーロウの他の劇にくらべて全体の行数が約半分と非常に短い劇である。行数にして他の二分の一程度である。これは、古版本印刷に際してマーロウの原稿によったものでなく、上演の便利のために劇場が削除して作りあげた台本を印刷したものであろうというのが有力な説である。それに加えて、作者マーロウも急いで書きあげなければならなかった事情もあったのであろうとも言われている。

最初の上演は1593年1月ストレインジ卿劇団 (Lord Strange's Men) によってローズ座 (the Rose) においてであったとヘンズロウ (Henslowe) の日記にはあり、このあと、疫病が流行したために、枢密院 (the Privy Council) はロンドンにおけるあらゆる興行を禁止してしまった。そのため再度上演されるのは、1594年6月19日のことであり、この時は劇場はローズ座であるが、劇団は提督劇団 (the Admiral's Men) であった。その後同年9月25日までに10回上演されたという記録がある。当時イギリスにはカトリックを憎悪する空気が醸成されていて、新教徒迫害の張本人であるギーズが主人公たる劇であることが当時のロンドン市民にうけいられ興行として成功であった。

1602年7月、パリの劇場でエリザベス女王が舞台に登場する劇が演じられ、その筋が反英的であるところから、当時の駐仏イギリス大使が抗議したことがあった。これに対してフランス政府は、イギリスの舞台にもギーズ、フランス国王(シャルル四世)がのせられているのではないかと反駁したという。この劇とは明らかにマーロウ作「パリの虐殺」であった。その後イギリス政府がフランス国民の感情を損うことを恐れたため、この劇はその後イギリスの舞台から消滅することになってしまった。

2

マーロウの「マルタ島のユダヤ人」(the Jew of Malta)の冒頭、序詞 (prologue) はマキアベリが登場して、次のように述べている。

[Prologue]

[Enter] Machevil

Mach. Albeit the world think Machevil is dead,
 Yet was his soul but flown beyond the Alps;
 And now the Guise is dead is come from France,
 To view this land and frolic with his friends (1~4)

つまり「パリの虐殺」の中心人物たる ギーズ公爵は、「マルタ島のユダヤ人」の主人公バラバス (Barabas) に匹敵するマキアベリ主義者であることが徐々に明白になってゆく。劇は新教徒のナヴァール国王 (King of Navarre) とフランス国王チャールズ九世²⁾ (Charles IX) の妹で旧教徒のマーガレット (Margaret) との婚儀がとりおこなわれるところから始まる。フランス国王の母キャサリン皇太后 (Queen-Mother of France [Chatherine de Medici]) は信仰の違いからこの結婚には不賛成であることが彼女の傍白によってわかることになる。第二場、ギーズ登場して言う。

Guise. If ever Hymen lour'd at marriage-rites
 And had his alters deck'd with dusky lights;
 If ever sun stain'd heaven with bloody clouds
 And made it look with terror on the world;
 If ever day were turn'd to ugly night,
 And nightmade semblance of the hue of hell;
 This day, this hour, this fatal night,
 shall fully show the fury of them all*, (ii 1-8)

ギーズもキャサリン皇太后と同じ理由でこの結婚には反対である。第二場から第三場はかけて、ギーズはナヴァールの皇太后 ('Old Queen' of Navarre) が新教徒に味方しているということで毒薬を塗った手袋を薬屋に作らせそれを献上させる。ナヴァールの皇太后は手袋を受けとり、その毒の香りをかいで死ぬ。さらにはやはりユグノー教徒の指導者ひとり提督 (The Lord High Admiral [Coligni]) を部下に狙撃させ死に至らしめる。第五場から第九場にかけてギーズはキャサリン皇太后の意をうけ

* 引用は H. J. Oliver 編 *Dido Queen of Carthage and the Masscre at Paris (the Revels Plays)* による。

て、大砲と鐘を合図にユグノー教徒の大虐殺を開始する。ギーズは先頭に立って殺戮をおこなう。犠牲者にはプロテスタントの説教者ロレイン (Loreine, Protestant preach) もいれば、哲学の教授レイマス (Ramus, a Professor of Eloquence and Philosophy in the Collège de France) もいる。レイマスの場合には殺されるまでにギーズとの間に長い問答があるが、その最初は次のようになっている。

Guise. Stab him.

Ramus. O good my Lord, wherein hath Ramus been so offensive?

Guise. Marry, sir, in having a mack in all

And yet didst never sound anything to the depth.

Was it not thou that scoff'dst the *Organon*

And said it was a heap of vanities? (ix 22-7)

.....

「あらゆる学問をなまかじりして、しかも何事においても底の底まで探ったことはない。……」といわば言いがかりをつけて、殺害の原因とするという具合である。

一方チャールズ九世がユグノー教徒殺戮を後悔していると知ったキャサリン皇太后はチャールズを殺してチャールズの弟ヘンリー (この時はアンジュー公爵 [Duke of Anjou] であった) を王位につけると言う。そしてその言葉どおりチャールズ九世は死に、ヘンリーがヘンリー三世王となる。(第十四場) 第十六場ではナヴァール王が部下にギーズと戦う意志を表明する。それに対してヘンリー三世は、ギーズ、エペルヌーン (Epernoun), ジョワヨー公爵 (Duke of Joyeux) を集め、ジョワヨーを将としてナヴァール王と戦わせる。その間ヘンリー王の寵臣ムゲルーン (Mugeroun, minion of Anjou) 登場。ムゲルーンはかねてからギーズの妻と恋仲であった。そこで王はムゲルーンにギーズ公夫人のことでギーズに刺殺されるぞと警告する。次の第十八場ではジョワヨー公爵戦死が報じられ、ナヴァール王が従者と登場、勝利を宣言する。

Nav. The Duke is slain and all his power dispers'd
And we are grac'd with wreaths of victory,
Thus God, we see, doth ever guide the right,
To make his glory great upon the earth. (xviii 1~4)

そしてさらに、イギリスの女王と力をあわせて、教皇の手先を追い払うと決意を述べる。

Nav. And with the Queen of England join my force

To beat the papal monarch from our lands(xviii 15-6)

第十九場は、比較的長い場であってひとりの兵士がマスケット銃をもって登場し、ムゲルーンが公爵夫人を公爵から奪った罪状を述べたてているところへムゲルーン登場、この兵士に射殺される。直後にギーズと従者、さらにその後ヘンリー王とエペルヌーン登場、ヘンリーはギーズに対してギーズが一团の兵を集めたそうだがわがためにはならぬことだと言う。ギーズはそれは神の福音をひろめるためフランス王への反逆ではないと弁明する。しかしヘンリーもエペルヌーンも信用しない。ヘンリーはパリ市民がギーズに味方していることを知り、パリはフランス国王が安住できる場所ではないからブロワ (Blois) に行くと言って退場。第二十場はナヴァール王が手紙を読みながら登場するが、それはギーズがフランス国王に対して武装蜂起したことが書いてあり、ナヴァールがフランス王援助の決心をする。第二十一場は護衛隊長と三人の刺客登場。続いてヘンリー王とエペルヌーン、さらにギーズが王のところへやってくる。王はギーズの忠誠心を疑うことはないと言ってエペルヌーンと共に退場。ひとり残ったギーズに刺客三 (Third Murderer) が近づき、閣下を殺害すべく派遣された者だと言うが信じない。そして *Yet Cæsar shall go forth.* とする。(これは Shakespeare の *Julius Cæsar II, ii. 28* そのままの科白である) この直後刺客一、刺客二が出てきてギーズを刺す。ギーズは

*Guise. Trouble me not, I ne'er offended Him,
No will I ask forgiveness of the King.
O that I have not power to stay my life,
Nor immortality to be reveng'd! (xxi 77-80)*

……………

「神に対して罪を犯したことはないし、王の赦しを乞うこともない。……」そして最後には

Thus Cæsar did go forth, and thus he died (xxi 87)

と言って死ぬ。キャサリーン皇太后はギーズの死を非常に残念に思う。第二十二場、ギーズの弟ロレインの枢機卿 (Cardinal 'of Lorraine') 刺客に絞殺される。第二十三場、ギーズの末弟ドゥメイヌ公爵 (Duke Dumaine) ギーズの死を知らせる手紙を読みながら登場、そこへひとりの修道士が来て自分はジャコバン派の修道士であるが、自分の良心を満足させるために国王を殺す (*I am a friar of the order of the Jacobins, that for my conscience' sake will kill the King*) とする。第二十四場は最終場であるが、ヘンリー王、ナヴァール王その他登場。かつては敵対していた

が、今や和解が成ったとヘンリー王が言う。その時パリ市民から手紙をもった修道士登場。エペルヌーンがこの修道士の顔つきが気に入らぬから、身体を探ってみると申し出るが、王がそれを制止する。しかし王が手紙を読んでいると、その修道士は小刀で王を刺す。王は小刀を奪いとして修道士を刺し殺す。外科医がよばれて登場し、傷をみるが、刀に毒が塗ってあったのでヘンリー王は助からないと言う。その前、ヘンリー王はイギリスの大使をよびよせてこの事件を警告としてイギリスの女王に知らせるように言おうと言う。最後にナヴァール王にフランスの王位についてもらうよう頼み死んでゆく。最後のことばは、

K. Henry.

Salute the Queen of England in my name,

And tell her, Henry dies her faithful friend. (xxiv 104-5)

3

「ギーズは冷酷と狡猾という点ではバラバスに似ているし、無限の野望という点ではタムバレインに似ている。」⁹⁾ とフィリップ・ヘンダーソン (Philip Henderson) はその著 'Christopher Marlowe' の中で言っている。冷酷という点においては、開幕間もない時のナヴァールの皇太后暗殺のたくらみと実行にまず第一にあらわれている。ナヴァール皇太后はフランス皇太后キャサリーンに比べれば、それほど勢力はないもののように思われる。しかし彼はその影響力のなさそうなナヴァール皇太后を that huge blemish in our eye/that makes these heresies in France (II, 21-2) とみなしている。彼の側にとって異端であるものは、たとえ小さなものでも排除せねばならない。ましてやナヴァール皇太后の存在は大きなものと思ひこんでいるとすればである。また第五場の提督殺し、第七場のロレイン、第八場のセルーン (Seroune)、第九場の学者レイマス、同じく第九場での二人の教師いずれもギーズから見れば弱者であるが、彼の野望実現のための妨げとなるものはことごとく抹殺せずにはおかぬということである。

彼にとっての異端は徹底的に排除するが、正統はこれを信奉してゆくのかというと、これがそうでもない。マーロウがその実生活において無神論者 (atheist) といわれていたように、ギーズも第二場の独白中に次のような表明をする。

.....

Religion : O Diabole!

Fie, I am asham'd, however that I seem,

To think a word of such a simple sound

Of so great matter should be made the ground. (ii, 63-6)

単純なひびきの言葉とは宗教のことである。そもそも彼ギーズがカトリック擁護のために、ユグノー教徒を迫害したのは、極めて世俗的な王位につくためということだったのだ。そして王位につくためには、チャールズ九世の側に立つのが有利と考えたからである。キャサリン皇太后は強い性格の持主であるが、その子チャールズ、その弟、のちのヘンリー三世も優柔不断な点がみられる。ある方向に突進してゆくことができず、時に躊躇を示すことがある。その間隙をつくのが術策にたけたギーズなのである。

大いなる野望を抱く点では、タムバレイン大王に匹敵するかもしれないが、実際の行動においては、はるかに及ばなかった。トルコをアラビアをと席捲したタムバレインに比べれば、ギーズの場合の規模は小なるものと言わざるをえないだろう。野心だけはあっても、それを実現してゆく力量に欠けていた。上にも述べたように、ギーズが立ちむかってゆくのはおおむね弱者に対してであって、強者にではない。

ギーズの最期はやはりマキアベリ主義者の彼としては不用意、不自然なものではなかったか。ヘンリー王、エペルヌーンらが退場し、ひとり残っていたうの独白は

Guise. So; now sues the King for favour to the Guise,

And all his minions stoop when I command.

Why, this 'tis to have an army in the field.

.....

Now do I but begin to look about,

And all my former time was spent in vain.

Hold, sword, for in thee is the Duke of Gu'se's hope. (xxi 48-57)

この独白が彼の絶頂であった。事実はそうではなかったのに、ギーズは「今や国王までがこのギーズの愛顧を求め、私が命ずる時はすべての寵臣が身体を屈める。さて、これぞ戦に軍隊を擁しているためなのだ。……」つまり王の方が遠慮をしているのだと錯覚していた。しかし王の方では三人の刺客を用意していたのである。ギーズは王のところへ来る時に、かなり以前から自分の胸のうちにあった反逆の気持を王は既に見抜いていたと知るべきであった。そうでなければ王位を窺うなどということは不可能であったのだ。

第十五場、ギーズ公爵夫人と侍女が登場して、ヘンリー三世がアンジュー公爵時代の寵臣のひとりであるムゲルーンに、夫人が恋文を書いている。そこへ夫のギーズが

はいつてきて、その手紙を取りあげて読み、すっかり事情を悟ることになる。そして嘆息しかつ激怒し、ムゲルーン殺害の決意をする。

Guise. Thou trothless and unjust, what lines are these?

Am I grown old, or is thy lust grown young;

Or hath my love been so obscur'd in thee

that others needs to comment on my text?

.....

But villain he to whom these lines should go

shall buy her love even with his dearest blood. *Exit* (xv 23-40)

さらにこれに続く第十九場冒頭部分、銃をもった兵士が登場し、ムゲルーンの登場前から彼によびかける、卑猥な含蓄のある非難の言葉、この非難の言葉の終わったところでムゲルーンが登場し、忽ち射殺される。この部分はこの劇の筋からはもとより乖離したものであるが、それでもなにか違和感が存在するところである。当時は合作がおこなわれることがまれではなかったが、マーロウは合作をしなかったと言われているので、恐らくマーロウの手になるものであろう。しかしこの劇の醸成してきた緊張感が削がれてしまうのではないか。つまりここでギーズの冷酷と鬱勃たる野心が急に萎んでしまう感を与えるのではなからうか。

(注)

- 1) Frederick S. Boas: Christopher Marlowe A Biographical and Critical Study (Oxford 1940) pp. 151~171, 第一節の記述はこれによるものである。
- 2) Charles フランス国王であるからシャルル九世と表記すべきであろうが、すべてをフランス語発音の通りにあらわすことは困難であるため、英語の発音に近いかなで表わした。他も同様である。
- 3) Philip Henderson: Christopher Marlowe (Longmans 1952) p. 111.
他に参考としたもの
U. M. Ellis-Fermor: Christopher Marlowe (Methuen 1927)
Michel Poirier: Christopher Marlowe (Chatto & Windus 1951)
Paul H. Kocher: Christopher Marlowe (University of North Carolina Press 1946)

(たにざき ひさと 本学教授・英語)